病理病態検査学演習Ⅱ(Graduate Seminar of Pathological AnalysisⅡ)

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
澤田 浩秀、山口 央輝	1年次 後 期	選択	2	48	演習	あり	巻末掲載	可

授業概要 (内容と進め方) 及び 課題に対する ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法	病理病態検査学演習Ⅱでは、パーキンソン病モデルマウスの運動解析から、その組織標本を用いた実践的な病理形態学的解析、生化学的および免疫学的解析（ELISA、RT-PCR等）について学修する。また、認知症患者に対して実践する心理検査を経験するとともに、実際に認知症カフェなどに参加し、認知症患者と関わることによってコミュニケーションを体験する。 ＊実務経験を持つ教員（澤田、山口）が授業を進める。 課題に対するフィードバック方法／レポートに対して討論するほかコメントをつけて返却する。
授業の位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー③「健康に対する社会的ニーズを認識するとともに、グローバルな視野を持ち、科学的根拠に基づき、自ら考え、判断し、課題解決に向けて対応することができる。」及び④「臨床検査技師の役割を探求し、臨床検査学分野の高度な実践者、教育者及び研究者として社会に対して責任を果たし、貢献できる。」の達成に寄与している。
到達目標 (履修者が到達すべき目標)	1．パーキンソン病モデルマウスの運動解析、病理組織学的解析、および生化学・免疫学的解析が実施できる。 2．認知症心理検査および認知症患者とのコミュニケーションが実施できる。
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	第1回～第24回事前学習：動物の病理組織解析法、運動解析法、ELISA、RT-PCRなどの解析法について熟知しておくこと。認知症心理検査法についても熟知しておく（各30分） 第1回～第24回事後学習：講義内容で不明な点は、講義終了直後もしくはオフィスアワーを利用して質問するなどして明確にするよう努める／復習のための課題を課すことがある（各30分） ※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（２単位15回科目の場合：予習+復習４時間／1回）（１単位15回科目の場合：予習+復習1時間／１回）（１単位８回科目の場合：予習+復習４時間／１回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。

授業計画			
	第 1 回	パーキンソン病マウスを用いた運動解析１	澤田浩秀
	第 2 回	パーキンソン病マウスを用いた運動解析２	澤田浩秀
	第 3 回	パーキンソン病マウスの病理組織標本の作製（固定、包埋、薄切）１	澤田浩秀
	第 4 回	パーキンソン病マウスの病理組織標本の作製（固定、包埋、薄切）２	澤田浩秀
	第 5 回	パーキンソン病マウス組織標本を用いた免疫組織化学（酵素抗体法）２	澤田浩秀
	第 6 回	パーキンソン病マウス組織標本を用いた免疫組織化学（酵素抗体法）３	澤田浩秀
	第 7 回	パーキンソン病マウス組織標本を用いた免疫組織化学（蛍光抗体法）１	澤田浩秀
	第 8 回	パーキンソン病マウス組織標本を用いた免疫組織化学（蛍光抗体法）２	澤田浩秀
	第 9 回	パーキンソン病マウス組織標本を用いた画像解析１	澤田浩秀
	第 10 回	パーキンソン病マウス組織標本を用いた画像解析２	澤田浩秀
	第 11 回	パーキンソン病マウス組織を用いた生化学的解析１	澤田浩秀
	第 12 回	パーキンソン病マウス組織を用いた生化学的解析２	澤田浩秀
	第 13 回	パーキンソン病マウス組織を用いた免疫学的解析１	澤田浩秀
	第 14 回	パーキンソン病マウス組織を用いた免疫学的解析２	澤田浩秀
	第 15 回	認知症心理検査１（MMSE、HDS-R）１	山口央輝
	第 16 回	認知症心理検査１（MMSE、HDS-R）２	山口央輝
	第 17 回	認知症心理検査２（MoCA-J、CDT）１	山口央輝
	第 18 回	認知症心理検査２（MoCA-J、CDT）２	山口央輝
	第 19 回	認知症心理検査３（ADAS、CDR）１	山口央輝
	第 20 回	認知症心理検査３（ADAS、CDR）２	山口央輝
	第 21 回	認知症患者とのコミュニケーション１	澤田浩秀
	第 22 回	認知症患者とのコミュニケーション２	澤田浩秀
	第 23 回	認知症患者とのコミュニケーション３	澤田浩秀
	第 24 回	まとめのディスカッション	澤田浩秀

評価方法 評価基準	レポートで評価する（100%）		
教科書	特に定めない	参考書等	必要に応じて教員が配布する。
学生へのメッセージ	認知症はこれからの社会において避けては通れません。在宅医療を考える上での知識として重要です。 演習では、怪我をしないよう十分注意して行うこと。マウスの運動解析、認知症患者とのコミュニケーションが実践できない場合は、代替手技を実施する。		